

ナマステ



特定非営利活動法人  
自然文化誌研究会 会報誌

161号

2026年1月20日発行号

2026年、今年もよろしくお願ひします。

自然文化誌研究会 代表理事 中込卓男（なかごめたくお）

昨年2025年は自然文化誌研究会、50周年でした。6月21日(土)に創立50周年記念座談会をzoomにて開催しました。(10:30~16:20) 6時間にわたる座談会でしたが、50年を語るにはとても短く、私など持ち時間を大幅に超過してしまいました。3部構成で、司会も含め10名が発表に関わりました。この50年、いろいろなメンバーがすごいことをやってきたのだと改めて思います。この座談会の様子は資料も含めて本会のホームページからアクセスできます。興味のある方はご覧ください。

10月4日(土)には、東京学芸大学の環境学習研究センター多目的室および農園で、13:00 第1部『INCHと私これまでとこれから』 15:00 第2部『50周年を祝うパーティー！みんなで盛り上がろう！』を行いました。懐かしい人達と遅くまで話しました。

また、「INCH50周年記念誌」もこのときに発行し、集まった皆さんに配ることができました。いろいろな人がいろいろな視点で、書いています。なかなかいい記念誌ができたと思います。

この会は、木俣美樹男が創設し、様々な試みをし、理論を構築し研究者としてもこの会を支えてくれました。彼のホームページを見れば実に多くの足跡等がわかります。その中で私のような実践者を多く育ててくれました。50周年は、私を含め創設メンバーにとって世代交代の時だと思います。50周年を終えて一番良かったことは、若い世代の人達とINCHについて話すことができたことです。

ELF環境学習について、zoomミーティングを2回行いました。いろいろな話の中で、時間をかけてこれからINCHを考えるきっかけになってくれればと思っています。あるメンバーが言っていました。「楽しいから、やってきた。」と。

私もこの50年、楽しいからやってきたんだとしみじみ思う正月です。今年もよろしくお願ひいたします。

## 『第22回 NPO法人自然文化誌研究会 通常総会』のご案内

2004年に東京都の認証を受けてから、第22回目の総会を行います。昨年に引き続き、オンラインでの開催としました。正会員の皆様はぜひご出席ください。また出欠を同封のハガキでお知らせ下さい。このハガキは欠席の場合は委任状となっております。ご意見などもお気軽に寄せください。なお、正会員以外の会員の皆様もオブザーバー参加が可能です。

日時：2026年2月16日(月) 19:00 開始～21:00 終了予定

場所：ZOOMでのオンライン会議

議題：①2025年活動報告・収支報告 ②2026年活動計画・収支予算 ③その他

\*出席される方にはzoom会議のURLをお知らせしますので、2月6日までに事務局までご連絡ください。

# 『冒険学校まふゆのキャンプ 2025』報告

## ～冒険・探検 2度目の村長～

鈴木風馬（自然文化誌研究会 運営委員）

2025年12月26日～12月28日の3日間、小菅村「清水バンガロー」で開催した「冒険学校 まふゆのキャンプ 2025」の報告をします。

昨年に引き続き2回目の「村長」ということで、再び子どもたちとがっつり向き合うことに挑戦しました。去年よりも参加者が多く、初参加の子もいて、何をしようかなあと思っていましたが、INCH50周年記念の一連のイベントで、「INCHと冒険探検部」の理念の片鱗を覗くことができたので、「冒険・探検」できるようなことを一つやってみようなんて考えながら参加しました。キャンプの運営メンバーの中でも、これまでやってきたプログラムの繰り返しではなくて、ちょっと新しいことをという空気もあって、焚き火、餅つき、野鳥観察、星空といったプログラムに加えて、今回は「猟友会の猟師さんに来てもらって、話を聞いたり罠を見せてもらう」、「餅つきに村のベテランをお招きしてお話を聞く」、「仏舎利塔を探検する」といった新しい試みもやってみました。1日目の午後から早速、村の猟友会の小竹隼人さんに来てもらい、村では狩猟する動物はどんな種類がいるとか、鉄砲と罠の使い分けとか、熊は県の特別許可で狩猟するとか、獲ったら報奨金が出るから、半分趣味半分仕事の人が多いなど、色々聞けて勉強になるし、子どもたちも興味津々だったのがとても印象的でした。罠の実演では、鹿を獲るためのワイヤーを使った罠を見せてもらって、使い方、原理、かかったらどうなるか体験した子もいて、なかなか面白いプログラムになったと思います。

1日目の夜に、いつもの通り「星空」と「ナイトハイク」を用意していたのですが、いつのまにか「ナイトハイク」ではなく「おばけさがし」になっていて、子どもたちの発想力を甘くみていたなと感じました。

2日目は、午前中は野鳥観察、昼前から餅つき、午後は仏舎利塔を見に行こうということで、盛りだくさんの1日でした。まず野鳥観察では、シジュウカラやコガラ、ホオジロ、モズ、トンビなどの鳥を探すだけではなく、ヤママユガの繭を見つけたり、カラスウリをとったり、講師の加藤源久さんにガビチョウとウグイスの巣を頂いたりしました。見られた鳥の種類は少なかったけど、ジョウビタキのことを小菅では背中の羽の白い模様から「だんごしょい」(団子背負い)というとか、昔は水たまりが凍ったらスケートをしたとか、ヤドリギの実をじっくり観察するなど、こちらも色々と聞けて、毎回ながら勉強になるなあと思います。

キャンプ場に戻って、餅つきをしているところに、スペシャルゲストとして守屋アキコさんをお呼びして、囲炉裏でお餅を食べながらおしゃべりをしました。熟した渋柿を持ってきていただき、「焚き火で芯まで温めるとおいしい」とおっしゃるので、じっくり焼いてみるとこれが渋くない！皮を剥いてスプーンでくり抜いて食べると甘くておいしいスイーツになって感動しました。アキコさんも餅つきはもちろん大ベテランなので、ちぎり餅ならこのくらい柔らかいのがいいが、のし餅にするなら水は少なく、蒸すときと返す人の腕で、硬めに仕上げるといいとか、返す時は臼と餅との間に手を差し込んで剥がしながらやると良いとか、鏡餅は丸く大福を包むように整えていって、最後に横からちぎると綺麗にできるなど、なんだか肝心なところを聞き忘れたかもしれない気もしますが、なかなか面白いお話を聞けました。



餅を食べ終えて、今度は子どもたちを焚き付けて「仏舎利塔」へ行きました。「山の上にナゾの白い塔があるらしい」ということで、余沢地区から林道へ入り、登山口までは車で行き、そこからは歩きでギリギリ車が通れる道幅の登り坂を1時間ほどかけてゆっくり進みます。途中にはコンクリートで固められた基礎みたいなものがあったり、橋には水タンクとポンプがあったり、中腹の開けたところには巨大な「南無妙法蓮華経」と書かれた石碑と日本山妙法寺と書かれた建物のあるところもあり、行くまでの道も見どころが多くて、登るのはつらいけどなかなか面白い場所でした。山頂が近づくと、木々の間から覗く青空が一部だけ、明らかに雲ではない白さが見えて、坂道を登り切ると美しい白亜の塔に、仏像が4体納められた建物が山頂に建っていました。仏像は全てお釈迦さままで、金色に塗られていて、姿勢が違

うのだけど、その場だけではその意味まではわかりませんでした。

帰り道、行きで通った橋のポンプのところで車が登ってきて、避けると止まって人が降りてきたので、話を聞くと上の石碑のところの建物(お寺)の住職さんで、これから年越しのため帰るところだとおっしゃっていました。現役に見えたポンプも上のお寺に水を送るためのものとのことで、スイッチを入れるために止まったようだった。帰りはスタスタ降りて 40 分、子どもたちに感想を聞くと、「すごかった」「綺麗だった」「つかれた」「ハリボテじゃん」など、自分なりに達成感を感じたり、発見をしてくれている感じがして、行ってよかったなと思いました。

3 日目はもう帰るだけですが、帰る準備をした子たちとモルックをしたり、小学生以来の「はないちもんめ」をやつたりして、とても楽しかったです。

今回のキャンプは、子どもたちと一緒に「冒険」をして、「発見」に「感動」することが、とっても楽しくて仕方がなかったです。これからもまだまだ見つけてない「発見」と「感動」を探すように、「冒険」して行こう、と思えたキャンプでした。

## 【スタッフの感想】

### ① 松井咲希さん（高校 3 年生・元参加者）

小学生の頃、何も考えずに楽しんでいた「キャンプ」は、スタッフとして関わる立場になった今、少し違って感じた。今回は特に、教育の道に進むと決めてからの参加だったからそう感じたのかもしれない。参加者として過ごしていた頃には気づかなかったことが、スタッフという立場になって初めて目に入るようになった。今回のキャンプで特に印象に残ったのは、温泉の時間だった。参加者だった頃、風呂上がりにスタッフから髪の乾き具合で点数をつけられ、何度もドライヤーをかけ直しに戻されたことがある。当時は正直、面倒くさいとしか思っていなかったが、スタッフとして参加した今、そのやり取りは子どもたちの体調などを気遣った行動だったのだと初めて気づいた。実際に今回も、なかなか髪を乾かそうとしたがらない子がいたため、当時と同じように点数をつける方法を取り入れてみた。すると、嫌がっていた子も楽しそうに乾かし、自然と全員が終えることができた。最後には子どもたちの方から「何点？」と聞いてきて思わず驚いた。この出来事を通して、子どもに対してどのように関わるかの難しさを感じた。参加者だった頃は気づかなかったが、何気ない時間にも多くの工夫があったのだと、スタッフとして実感した。相手を動かすために指示を出すのではなく、子ども自身がやりたいと思える関わり方をこれからも意識していきたい。



### ② 加藤奈々さん（東京学芸大学 4 回生）

学生として参加する最後のキャンプは、これまでで一番楽しいキャンプとなりました。これまでのキャンプでは、周りのスタッフのようにうまく動けたらいいなど憧れながらも、自分から行動できず、反省するominatorがありました。しかし今回は、「自分で考えて動いてみよう」と意識し、子どもたちの様子を気にかけながら、自分なりに考えて行動できた場面が増えたと感じています。

プログラムの中では、仏舎利塔を見に行つたことが強く印象に残っています。仏舎利塔がどのようなものか分からないうま、片道一時間以上かけて山道を登り、白く大きな塔が目の前に現れたとき、大きな感動を覚えました。まるで日常とは違う世界への入り口を見つけたような気持ちになり、心からわくわくしたのを覚えています。冒険のような体験ができたことも、このキャンプの大きな魅力でした。

また、今回のキャンプで自分が変わったと感じたことは、子どもたちの前で思い切りふざけ、全力で楽しめたことです。これまで「優しく見守る」接し方をしていましたが、今回は子どもが引くほど本気でふざけてみました。すると、子どもたちは以前よりも楽しそうに関わってくれるようになりました。大人が全力で楽しむ姿や熱量は、子どもたちにしっかり伝わるのだと実感しました。子どもと一緒に楽しむことの大切さを、改めて学んだキャンプでした。

来年からは小学校教員として歩み始めますが、ぜひまたこのキャンプに参加したいと思っています。学生として、そして教員として経験を重ねた自分が、次はどのような視点で子どもと関わるのか、今から楽しみです。

## 【参加者の感想】

### ①安倍隼さん（小学 5 年生）

今回のキャンプで楽しかったときは、1 日経てば色々なものが凍っていたこと。夏に楽しかった川には入れなかっただけ楽しかったです。

### ②安倍健さん（中学 1 年生）

#### 冬のキャンプ～米炊き編～

自分は初めて冬のキャンプに参加しました。そのなかで、夏同様、米を炊きました。

米を釜で炊くのは夜の二回なので（確かそうだったはず）それを担当しました。

一回目は芯が残りとても食べられるようなものではありません。その際反省し翌日はラストなので汚名返上といえるような気概を持ちました。

自分は翌日、仏舎利塔に行くため米を炊き始めるギリギリに帰ってくることがわかり、炊き始めるのは 4:30 なのに、みんなが餅つきしてる最中、自分は米炊く用の木を切り始めました。

仏舎利塔から帰ったらなんと炊く時間の 10 分前でして、実に自分をほめました。その後、前日の反省を活かし、浸水を長くし、責任感に耐えながら、遊び、美味しいものを食べてるみんなを横目に黙々とやっており、自分としてはすごいと思いました。

その際、スタッフさんたちが、自分が人にちょっとかいや、釜で焼きいもを熱しててる際にカバーしてもらつてありがとうございました。

そして、米ができて、炊き上がりふたをとり、中を確認しました。

真っ白であり、多少茶色目に焦げがありましたがとてもよく、その後食べてもらうとすごく好評でした。

#### ～星空観察とその他編～

自分はこのキャンプの際に星空観察に二回も行きました。そもそも夏のキャンプの際に、ダニエルのイチオシが冬の星空でした。なので自分は「なにがあってもいく」と決めてました。

スタッフさんの車のなかでふざけ、ヘリポートに行きました。自分は天体にそれほど知識があるわけではないですが、プラネタリウムの使用料が無料とおもうほど、星が黒い空から吹き出るようにあり、それをみながらフウマのわかりやすい解説を聞き、一息したあと 66 億の天体望遠鏡で有名な星をピントをあわせていくつも見せてくれました。

よく考えると普通の学生ならば夢のような話です。おかげで、夜、東京でも星を探したりしますが、やはり見えません。なのでできたら夏でも冬でも何年先でももう一回見たいです。

朝テントからでると、なんとニット帽が凍っておりそして髪の毛を触ると痛くて、「あれ、凍ってない？」と思い驚きました。ふと温度計を見るとマイナス 5 度でした。東京や平野がいかに暖かいかを身を持って知り、東京の寒さはかわいくて猫じゃないかと思いました。

この 2 回目のキャンプで夏のキャンプで話さなかつた参加者やスタッフさんと会話できてよかったです。ありがとうございました。



←スタッフの佐々木正久さんの YouTube 「まー君のナチュラルフ」で、「冒険学校まふゆのキャンプ」の活動の様子が観られます！！（チャンネル登録よろしくです）



# 『INCH まつり（ライブ）2025』開催

鈴木英雄（自然文化誌研究会理事）

今年も9月27日土曜日にいつものキャンプ場を使ったイベントを開催しました。メインは夕方からの音楽イベントですが、この機会にと昼間はキャンプ場の整備も行いました。またきのこ狩りにも出かけ、夜には美味しい料理になりました。

夜の部は楽しそうにお開きになったのが23時でした。そのままログハウスで宿泊です。

2026年も開催します。9月の第4土曜日、26日です。子供達のいない大人だけのキャンプです。是非お出かけください。



# タイ環境学習キャンプ 2025 報告

8月		活動内容
17日(日)	成田→バンコク	シリワット先生、チナタッタ先生との会食
18日(月)	バンコク→バンライ (パンダキャンプ)	チャオプラヤー川クルーズ
19日(火)	パンダキャンプ	ワークショップ 1、色画用紙のポシェット作り (子供向け) 2、染色の実験 (子供向け) 3、菌類について (大人向け)
20日(水)	パンダキャンプ→ ファイ・カ・ケン野生生物保護区	野生生物保護施設の見学 ゾウや野生の牛 (バンテン) などの観察
21日(木)	ファイ・カ・ケン野生生物保護区	トレイルウォーキング、水遊び
22日(金)	ファイ・カ・ケン野生生物保護区 →パンダキャンプ	カレン族の部落訪問 (ドリアン畑、民族衣装) タイマッサージ
23日(土)	バンライ→バンコク	バンライのマーケット見学 バンコクのビアホールでのチナタッタ先生とお別れ会
24日(日)	バンコク	バンコク自由行動
25日(月)	バンコク→羽田	

今回のキャンプは日本から親子参加者3組、大人3名の勢総9名。いつもタイで同行してくださる若林家族3名の計12名で行われました。野生動物保護区では、いつもは保護区内のヘッドクォーターの宿泊所に滞在するところ、レンジャーの研修があるということで保護区入口にある宿泊施設に滞在することになりました。施設は何とクーラー付きの新しい施設でとても快適に滞在できる場所でしたが、保護区入口にあるといつも最近はすぐ近くにゾウが出没するらしく、十分に注意するように言われ半信半疑に聞いていたが、実際、夕食の帰りに宿舎のすぐ近くの道路をゾウが横断し茂みに入って行ったのを目撃し、非常に驚いた。長いこと保護区には来ているが、以前と比べ生物保護が進んでいるようで、ゾウ、クジャク、シーベット (ジャコウネコ)、バンテン (野生の牛) などの野生動物が比較的容易に見られるようになってきている。また、今回の施設や土堤でゾウを観察する場所など保護区周辺を野生生物が見られる所として観光化しようとしている様子も窺える。今回、親子参加ではあったが冒険学校の現役の参加者が参加してくれたりして参加者も多様化してきているがのは嬉しいことだが、大学生の参加者がいないのは少し寂しいと思う。 (中込貴芳 自然文化誌研究会副代表理事)



## 【参加者の感想】

### その1 中学生の参加者

#### 初海外の環境学習キャンプ

この環境学習キャンプでしかできないよかったです。  
理由→カレン族の民族衣装を着ることができたから。  
民族衣装は一つ一つ模様が違うからワクワクでした。



#### 見られて、行けてよかったです

##### 其の一 野生動物保護区

理由→育児放棄や密輸されたクマやトラ、イグアナにさいちょうなど数多くの動物が集まっている。其の中でも、見られるポイントに行かないと見られなかったクジャクや象は迫力がありました。

##### 其の二 ワットポー（お寺）

理由→日本とタイのお寺の違いを感じました。日本の大仏は金ぴかで維持することはないが、タイの大仏は金ぴかのまま維持をしていました。ガイドブックを見て金ぴかのことを知っていても金ぴかで驚きました。

#### 食べられて良かったです

- ドリアン→最初は柑橘系の食べものだと思っていたが、ねっとり系でおいしかった。
- パッタイ→平べったく半透明の太麺の焼きそばのようなものです。もちもちで美味しい。
- マンゴーライス→マンゴーと甘めのもち米で食べました。合うのか不思議だったけれど美味しい。
- パンダン→緑でバニラのような味がするので不思議な感じがしました。

### その2 母親 タイ環境学習キャンプに参加して

日本とタイでは、地理的条件、気候的条件、経済的条件などが違うので、当然ながら環境教育へのアプローチも違うのですが、その違いを実地で理解できて、すごく良かったです。

勉強になりました。でも、日本でも取り入れられることは大いにあると思う。

野生生物保護区にも行ったら、野生のゾウ、シカ、孔雀たち…トラやヒョウが生息している痕跡。

英語では、ワイルドライフ サンクチュアリ になるのね。サンクチュアリ。すごいしっくりくる。

その一方で、自然保護区のために、先祖代々の土地から追われた少数民族もいるという。

勝手に開墾したり、狩猟されたら困るから。

どんな問題にも、一直線の「絶対的な正解」はないけど、学んで理解することは大事だと思う。

そして、タイ料理がめっちゃ美味しすぎる！！

あと 1 週間はタイ料理を食べ続けられる！って言ってたら、ココさんは

「日本食が恋しい…」だそうで、それって私の手料理が恋しいってこと？！ 中2女子が可愛いこと言うじゃない！と思ったら、

「サイゼ行きたい…」

オマエ、それはイタリアンだ。

ああ、ハーブとナンプラーの味が、早くも恋しい…。





(参加者の内原章子さん(うっちー)のイラスト報告です)



# 『自然文化誌研究会創設 50 周年記念』

## 『INCH と私 今までとこれからのご報告』

菱井優介（自然文化誌研究会理事）

10月4日、自然文化誌研究会（INCH）50周年記念イベントにご参加いただきありがとうございました。正直、ホッとしているというのが私の実感。

### ・久しぶり！

会場には「懐かし～」「変わったね（あるいは、変わらないね）」という会話が終始、飛び交っていたように思う。大同窓会をやろう、という実行委員会のねらいは、これで十分に達成されただろう。

### ・映像で振り返る50年

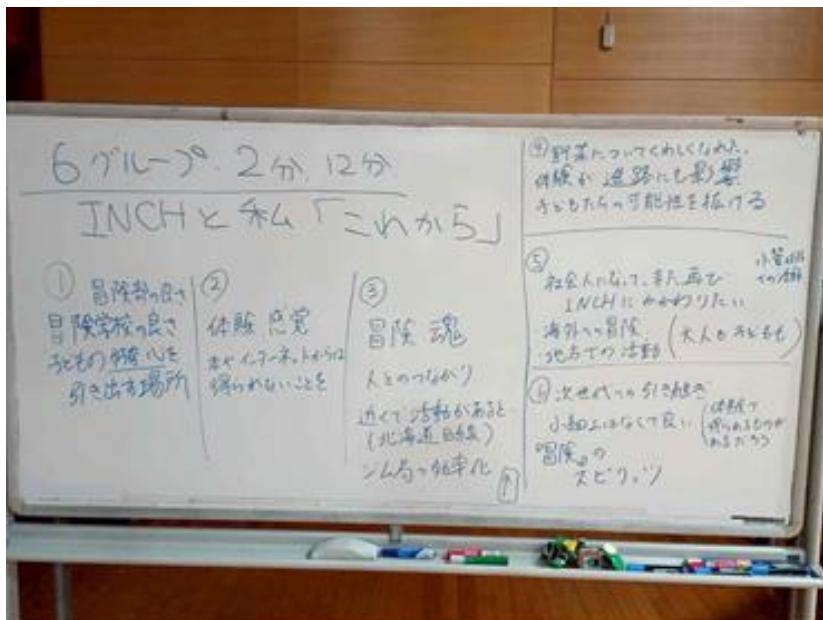
中込ミさんに編集していただいた映像を上映。みんなの若かりし頃の姿は、恥ずかしさと懐かしさでいっぱいだった。ご覧になりたい方向けに限定公開出来るように準備する予定です。すこしお待ちください。

### これまでを語る時間

創設期、冒険探検部、冒険学校、農学校…とINCHに関わり始めた年代ごとにグループに分かれてのトークセッション。車座になりそれぞれの思い出話で盛り上がっていただいた。

### ・これからを話す時間

世代を入れ替えて、INCHと私のこれからについてトークセッション。INCHとの関わりの度合いが違うメンバーでも話し合いは自然と熱くなっていたように思う。



### ・これからのキーワード

6つのグループで話をしてもらい発表した。

これらを一言でまとめるのは難しい。

- ・好奇心を満たす冒険・探検

- ・ここでしか出会えない体験や人

- ・次世代につなげる「冒険」

さまざまな思いや考えを聞く場になった。

INCHの大切にしてきた「部分」を感じることが出来る貴重な時間だったと思う。

### ・第2部は…

多くは語るまい。明け方まで続いた。

変な人たちの集まりはこれからも続く。

今回、50周年記念イベントに関わっていただいたみなさま、ありがとうございました。またお会いしましょう！

今回の再会と出会いがきっと新しいなにかにつながっていく信じて。

2025年12月末日 菱井優介





10月4日当日、北は北海道、南は九州から駆け付けてくれたのは90名を超える関係者の方々。東京学芸大学農園を舞台に、シシカバを食べ、木俣さんの料理もあり、古き良き空気も流れました。これにて、自然文化誌研究会創設50周年記念の3本柱…6月の記念座談会、50周年記念誌の発行、10月の記念の会が無事に終了しました。みなさまありがとうございました。

(事務局 黒澤友彦)

※会員のみなさまには50周年記念誌を送付させていただきました。

# 『藤農便り』 第42号

## 宮本茶園 宮本透（自然文化誌研究会運営委員）

2017年1月相模原市緑区佐野川で新規就農、茶栽培を始めて10年目に入りました。2018年から佐野川茶の相模原ブランド構築に取り組んできた藤野茶業部は残念ながら後継者を育てる事ができず、3月末に解散します。息子は「お父さんは十分頑張ったのだから、身体が不自由になる前に藤沢へ戻って来いよ」と言うのですが、まだ心は折れていないので宮本茶園が佐野川茶製品の生産・販売を担う準備を着々と進めています。藤野茶業部で取引契約している店舗と新規契約を結び、県農業技術センターの先生には今後の茶園経営を相談し、県農政課の農福連携事業と観光農園運営の研修会を受講し、相模原市の茶産地にふさわしい特色作りを考えています。

農福連携事業研修会では一緒に受講した相模原市農政課職員から市立障害者支援センター松が丘園を紹介され、佐野川の茶園管理作業に障害者雇用が可能かどうか担当職員と検討しています。高校生の頃、心身に障害を持つ人たちと一緒に農業がしたいと夢を語った宮本少年は学大特殊教育教員養成課程に入学したものの農業高校教員となり、夢はかないませんでした。2026年は高校卒業50年、68歳になった宮本老人の新年抱負は佐野川茶の相模原ブランド構築事業に農福連携を加え、少年時代の夢を実現させる事とします。

### ・秋の茶仕事

昨年6月に怪我をした右足首は腫れが引かず、地下足袋が履けるようになったのは11月下旬でした。長靴を履いて右足を引きずりながらの茶園管理作業、秋肥撒布に例年の倍以上時間を使って秋の彼岸が過ぎ、徒長枝処理は諦めました。9月末に秦野市の高梨茶園を訪ね、県農業技術センター指導の電気柵設置作業を視察しました。里山の自然と調和してきめ細やかに管理された高梨茶園、新規就農時から私が目指す茶園管理のお手本です。茶園更新の幼木育成過程や鹿食害を防ぐ電気柵設置工事の工程を学ぶ機会をいただき、深く感謝しています。

猛暑の夏を引き継いで高温の日が続いた秋でした。10月21日県農業技術センターの茶園巡回指導と茶園共進会出品予選が行われました。部員の茶園はまだ芽が伸びており、秋整枝作業は気温が下がる11月に入ってから行う方がよいと日程目安が伝えられました。2019年まで耕作放棄されていた大洞茶園は藤野茶業部活動で再生、2024年から宮本茶園が利用権設定をして管理しています。この茶園が共進会出品茶園となり、2年連続の上位入賞を目指して準備を進めました。慎重に整枝作業をして、審査前日まで力ヤを敷き込み、根気よく枯枝やゴミを取り除きました。藤野茶業部員として最後の茶園共進会出品、佐野川茶農家の矜持を示す事ができました。

秋整枝作業が終わると千木良から大豆殻を運び、茅場のススキを刈って茶園畝間に敷き込みます。茶草場農法の土作り、ゴエモン牧馬チーム秋葉さん家族が援農に通ってくださっています。ススキを茶園に運んだ小学6年生の娘さんは「相模原市にお茶産地があるなんて初めて知った！」と驚いていました。佐野川茶相模原ブランド構築の取り組み、市内小中学校の子どもたちに伝える手立てを考えないといけません。



### ・藤野茶業部「佐野川茶の相模原ブランド構築」さがみはらSDGsアワード2025優秀賞受賞

相模原市にはSDGsの達成に向けた取り組みや地域課題の解決、SDGsの普及啓発に取り組む企業・団体等を「さがみはらSDGsパートナー」に登録する制度があり、藤野茶業部は2023年7月登録証盾が交付されました。昨夏相模原市みんなのSDGs推進課から「さがみはらSDGsアワード2025」開催・取組募集案内メールをいただきました。藤野茶業部員の高齢化は深刻で2024年から佐野川茶生産農家は2軒となりましたが、佐野川茶相模原ブランド構築の取り組みは確実に成果を上げ、県茶品評会出品荒茶は2年連続上位入賞しています。8年間の取り組みが相模原市からどのような評価を受けるのか確認するため、エントリーシートを提出する事にしました。

限られた字数の中で審査員へ藤野茶業部活動を的確に伝える事は難しい作業で、耕作放棄茶園再生・管理作業の協同化・製品開発や学校給食食材提供・里山の環境保全と茶草場農法・市民グループや大学との連携等を書き綴りました。10月になってみんなのSDGs推進課より受賞決定の連絡があり、27日市立産業会館で表彰式が

開催され優秀賞をいただきました。取材を受けたタウンニュースや JA 神奈川つくり広報紙には記事が掲載され、佐野川茶を納めている千木良の寿麿庵からお祝いのお花が届き、表彰状・盾と一緒に藤野支店へ飾させていただきました。SDGs アワード受賞が藤野茶業部活動を市民に知っていただくきっかけになる事、期待しています！



#### ・相模女子大学との産学連携事業

2024 年秋相模原女子大大学院社会起業研究科の授業「起業・事業開発演習」で藤野地区が抱える社会課題調査と解決策のプレゼンテーションが実施されました。佐野川茶をテーマに扱った 4 名の院生有志が佐野川茶普及プロジェクトを立ち上げ、藤野茶業部との産学連携事業が始まりました。新製品開発や認知度を高める情報発信等が検討され、11 月に開催される「相生祭」でノンアルコールカクテル「茶くてる」が販売される事になりました。

リーダーの鍋倉さんから一大早にメールで「茶くてる」試作・PRチラシ作成等の取り組み状況を共有し、10 月 13 日相模大野のサガミクスで開催された「茶くてる」試飲会に参加しました。お客様に PR チラシを使って佐野川茶を紹介し 40 袋用意した煎茶製品は完売、サガミクスお茶製品売上げ最高記録だそうです。11 月 3 日は大河原副部長と相模女子大「相生祭」を訪ねました。「茶くてる」販売ブースは大盛況で、鍋倉さんが取材された読売新聞記事は約 500 杯が販売されたと報じました。展示ブースでは 1 年間の取り組みが分かりやすく紹介されてました。相模女子大学との産学連携事業、藤野茶業部解散後も続く事を願っています。



#### ・利用権設定をした農地の設定期間満了

昨年 7 月相模原農業委員会より「利用権設定をした農地の設定期間満了に伴う継続について」の通知が届きました。和田茶園の賃借権更新手続きは 9 月 26 日までに「農用地利用集積等促進計画要請申出書」を提出するよう記載されています。前号で「地主さんにお返ししようと考えています」と書きましたが、9 月になって更新手続きをしない事を地主さんに伝えました。話し合いの中で「耕作放棄せずにきちんと茶園管理できる人に引き継いでもらいたい」と要望され、「私がみちくさの会に入れていただき、皆さんと一緒に管理作業を続けます」と答えました。しかしながら、みちくさの会も会員の高齢化問題は藤野茶業部同様に深刻です。

上岩の花卉畠は吉田さんと古澤さん親子にロシアヒマワリ残渣を片付けてもらいました。穀物畠は悲惨な状態で、枯れた雑草は手が付けられません。年末の挨拶に地主さんを訪ね、地代を納める際に「6 月に右足を怪我してから畠の管理ができず、申し訳ありません。来年は賃借権の更新ができないかもしれません」と正直な気持ちを伝えました。耕作放棄地を増やさない努力、残念ですが私一人では担えなくなりました。



※佐野川に興味のある方は宮本（携帯：090-2205-8476 e-mail：kwangjuu1980@yahoo.co.jp）へご連絡ください。

## 冒険学校は「冒険」なのか（後編）

火と水にとける子どもたち  
宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

日常生活では分節化されている自己と世界の境界線が溶け合うような、体験そのものと自分自身が一体になってしまふような「遊び」。矢野智司は、こうした「溶解体験」を通じて生じる教育を、現在を未来のための手段として用いるような「有用性」を尺度とする「発達としての教育」と対比して、「生成としての教育」と呼んだ。

今回は、アウトドア・サバイバルとしての冒険・探検よりも広い意味で、つまり、「溶解体験」への没入およびそこからの帰還として「冒険」を捉えた上で、「冒険学校」においてそれがいかに看取されるか、実践を踏まえて考えてみたい。

### 5. 火と水にとける子どもたち

#### 【1】川遊びの難しさ

冒険学校が始まった当初、東京都五日市で行われていた時代から、一番人気のプログラムは「川遊び」だったそうだ。現在の冒険学校でも、子どもたちは呆れるほど長く川に入っている。水をかけ合ったり、魚を探したり、岩から飛び込んだり、あるいはただ流れに身を任せていたり。小菅川の水は冷たく、河原は山陰になっていて日中もあまり暑くはならないので、たまに、流石に寒くなって上がってくるが、しばらく焚き火にあたるとすぐに川へと戻っていく。



専門知識をさほど要さない川遊びには、多くのスタッフが参加したことがあるだろう。しかし、大人にとっても子どもにとっても充実した「川遊び」ができるスタッフはそれほど多くない（自分は二ガテ）。もちろん体が冷えるという体力的なものもあるが、根本的には「川遊び」が極めて純粋な「溶解体験」であること、それにもかかわらず、生命に関わる危険も孕んだプログラムであることが関係している。

例えば、同じ川で取り組むプログラムでも、「カジカ突き」や「魚捕り」「カエル探し」「沢登り」などは、一定の目的があるため、ある種の「有用性」の尺度を持ち込むことができる。そのため、成否をはじめ何らかの「終わり」を見通すことができる。他方、「川遊び」には、子どもが瞬間に小さな目標を立てることはあっても、本質的な「ゴール」は存在しない。そこでは、川で「遊び」ということそのもの、自然と一体となって体験する過程そのものが、極めて純粋に味わわれている。彼らは「何かのため」に遊んでいるのではない。だからこそ、あえて危ないことをやろうとしたり、大人から見れば「同じこと」を何度も繰り返したりする。

ここで重要なのは、複数の事象を「同じこと」として判断できるのは、それらの事象と距離をとって、すなわち自己と切り離して、客観的に比較しているから、ということだ。つまり、大人の客観的な目から見れば「同じ」でも、自己と世界が溶け合うような「遊び」のなかにいる子どもにとって、これらの体験は一つ一つ新鮮なのである。繰り返し続けていくと、なかには徐々に「遊び」から距離をとりはじめ、客観視するようになっていく子もある。そのとき、大人が適切な手助けをすれば、子どもの関心を阻害することなくスムーズに高度なプログラムへと移行するケースもある。しかし、あくまで「遊び」の瞬間においては、子どもたちはこうした移行を目指しているわけではなく、純粋に「遊び」そのものを楽しんでいるのだ。

子どもたちの安全確保という客観的視点が常に求められるスタッフは、子どもたちと全く同じ目線で「川遊び」に没入するわけにはいかない。一方で、「遊び」から完全に距離をとってしまえばそれはそれで、「見ているだけ」という最低限の関わり方しかできない。ともに川遊びを味わいつつ、安全には気を配り、ときに「遊び」から別の活動への発展を支援するためには、「遊び」との絶妙な距離の測り方を求められる。これを個人で行うのは極めて難しいため、複数の、経験値の異なるスタッフが協力しあうことが鍵になっている。

## 【2】予測不能性の象徴としての焚き火

「川遊び」と並んで、キャンプ場で多くの子どもが行うプログラムの一つに「焚き火」があるが、こちらにもまた繰り返しと、有用性からの解放が見てとれる。子どもたちは、必ずしも何かを焼いたり、温めたりするために火を焚くわけではない。火を焚くことそのものが楽しいのだ。

この楽しさを支えているのは、近年リアル化が進むコンピュータゲームはもちろん、メモリや「弱火」「中火」といった指標でコンントロールされた家庭のコンロの火では到底感じることのできない、自然が織りなす多様で動的なりズムだろう。焚き火は視覚(炎の色)、触覚(熱さや空気のゆれ)、聴覚(パチパチという音)、嗅覚(木が燃える匂い)など、五感のさまざまな部分を同時に刺激しながら、ひとときとして同じ姿をせず変化し続ける。自然の風向き、燃えた木と新しい木の配置、地面や木の湿り具合、焚き火にあたる人の位置など、実に多様なファクターが、子どもによる操作と動的に絡み合うことで、炎は予想外の動きをすることがある。熟練してくると徐々にコントロールすることができるようになるものの、どの条件がどのように作用して、火が今の状態になっているのかを完全に把握することはほとんど不可能である。だからこそ、子どもは焚き火に夢中になる。



こうした「遊び」を「冒険」と呼ぶのは、いささか大袈裟に感じるかもしれない。しかし、ここで思い出してほしいのが、「行きて帰りし物語」の構造である。これらの「遊び」において、焚き火の炎や川の水と、子どもたち自身との境界線は曖昧になっている。それは日常の生活世界から出て、「遊び」の世界へ踏み込むことであり、放っておけば、物理的なものを含む過剰な一体化へ、すなわち火傷や水難事故へとつながりかねない危うさを孕んでいる。だからこそ、そこには「帰還」が、すなわち「溶解体験」から日常の世界へと戻っていく回路が不可欠であり、それをもって子どもの「遊び」のなかに「冒険」を見出すことができる。こうした「冒険」の姿は、本格的なアウトドア・サバイバルでなければ「冒険」と呼べない、という固定的な見方はもちろん、「子どもにとっては全部が冒険だ！」などという乱暴なくくり方であっても、適切に看取することはできない。

## おわりに：「冒険」の言語化をめぐって

さて、三回にわたって「冒険学校」における「冒険」の諸相を論じてきた。最後に、こうした「溶解体験」としての「遊び」＝「冒険」に対し、大人がどう向き合うべきかについて、私の考えを一つ示しておきたい。

それは、体験の言語化をめぐる問題である。

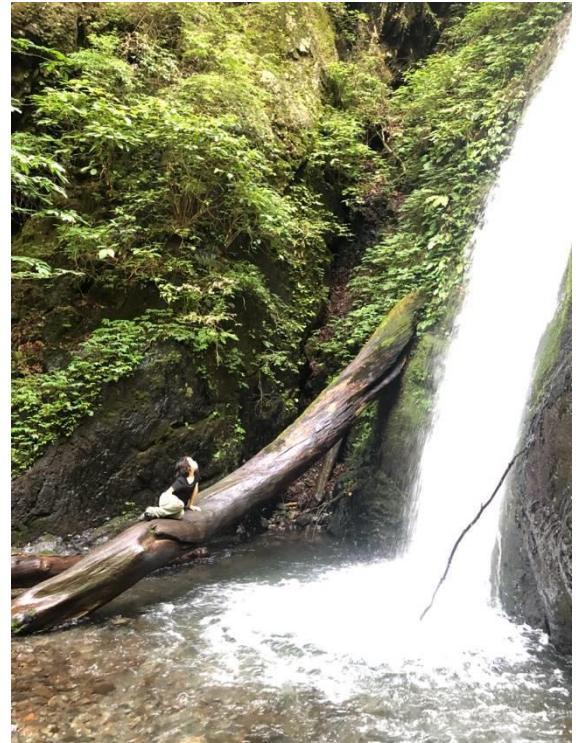
現代の学校教育では、何らかの体験をした後にはかならずと言って良いほど、「振り返り」として、口頭発表や作文といった言語化が求められる。活動がどのように成長へと寄与したのか、まさに有用性の原理に基づく成果が求められる学校教育において、評価の対象としての言語化が避け難いのは事実であろう。

しかし、「溶解体験」としての「遊び」が、こうした言語化による理性化・客体化と、本質的には相反するものであることを、大人は自覚しておく必要がある。基本的に、「言葉にする」ということは、対象と距離をとり、他者に伝わるよう語句を選択して再提示する行為である。対して、「溶解体験」としての「遊び」において子どもたちが感じているのは、むしろこうした「対象と距離をとる」ということの不可能さからもたらされる「言葉にできないなにか」である。こうした「なにか」を言語化するというのは、詩人や作家の創作活動と通じる高度な営みであって、適切に行えば「なにか」を他者と共有する回路となりうるし、それはそれで面白いのだが、下手に行えば体験を既存の言葉に当てはめ、わかったような気にさせて、豊かさを削ぎ落してしまうことになりかねない。

冒険学校でも、子どもに感想の言語化を求めるシーンは皆無ではない。近年（特にコロナ禍以降）感じるのは、そこで子どもたちの口から出てくるものの多くが、整えられ、一般的に「よい」とされるワードで固められた「発表用」の文言であることだ。それは学校教育の精度の高さと、子どもたちの“優秀さ”を物語るものであり、一概に否定すべきものではない。だが、冒険学校のような実践において大人が最も耳を傾けるべきは、それらの耳ざわりのよい文言などではなく、むしろ、それを捻り出すときに、彼らが削ぎ落としている「なにか」だと、（自戒をこめつつ）私は思う。

それは、あとになってふさわしい表現と出会うことこそあっても、そのときには適切に言葉にできないことの方が圧倒的に多い。だからこそ、強引な、あるいは不用意な「言語化」によって、あたかもそれをなかったことにしたり、別のナニカにしてしまったりしてはならない。大人が「言い換え」てしまうなどもってのほかである。無理に言葉にしなくてもいい。よくわからない今までいい。その「冒険」は、自分だけのもので構わないのだ。

（次号へ続く）



## ○2026年度の予定について（詳細は3月発行予定の会報ナマステ162号でご案内します）

のびと講座「野草の天ぷらとお茶つみの会」 4/19 @東京学芸大学環境教育研究センター彩色園（農園）

「冒険学校むらまつりキャンプ」 5/3-5（2泊3日） @小菅村いつものキャンプ場

「こすげ冒険学校」 8/1-7（6泊7日） @小菅村いつものキャンプ場

## ○事務局の麗しき日々

・まーしーが今年も佳作を受賞したもよう（山梨日日新聞）

・ひるまんか校長になったもよう

・ハズムカスしぶりに登場したもよう

・裏50周年記念の会は11月にヤス・美苗家で開催されたもよう

## ○自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称INCH（インチ）。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、50年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座（のびと研修会）』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は

年額（1～12月）です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円 学生会員：3,000円

賛助会員（個人・団体）：10,000円 家族会員：6,000円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

雜穀街道特別会員：1口1,000円から

・成合基金（冒険探検基金）：「成合基金」とご記載してください。

・寄付：「寄付」とご記載してください。

①郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

②ゆうちょ銀行：店名〇〇八 普通口座

口座番号 9479450

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 161号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

＜発行日＞2026年1月20日

＜編集＞自然文化誌研究会 事務局

＜発行＞ 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

＜事務局＞〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村3337-2

TEL: 090-3334-5328 (事務局 黒澤)

E-mail: npo\_inch@yahoo.co.jp

HP: http://www.npo-inch.ppmusee.org